

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	主人公の設定から見る『潤色栄花二代娘』
Auther(s)	福岡, 依鈴
Citation	国文学攷 , 243 : 1 - 14
Issue Date	2019-09-30
DOI	
Self DOI	
URL	http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00049726
Right	Copyright (c) 2019 by Author
Relation	



主人公の設定から見る『潤色栄花二代娘』

福岡依鈴

はじめに

豆男物の趣向を用いて豆女の活躍を描いた漁柳『潤色栄花娘』(明和七年へ一七七〇)序。以下『栄花娘』や外伝である『潤色栄花娘道中之巻』(明和七年へ一七七〇)以降成立か。以下『道中之巻』が刊行された後、その続編として寝ぼけ先生『潤色栄花二代娘』(安永三年へ一七七四)序。以下『二代娘』²が出版された。本作では、『栄花娘』・『道中之巻』主人公のお豆(以下、便宜上の区別のため、『栄花娘』の主人公を「お豆(栄)」、『道中之巻』は「お豆(道)」、『二代娘』は隠居後の名である「おかべ」と表記する)の娘である二代目お豆(以下、「お豆(二)」)が活躍する様子が描かれている。『栄花娘』同様、豆男物の中でも身体の微小性や魂の入れ替えという趣向を描いた江嶋其磧『魂胆色遊懷男』(正徳二年へ一七一二)頃刊か。以下『懷男』の系譜に連なる作品であるといえるだろう。

この『二代娘』の特色について、『浮世草子大事典』の宮澤照恵氏による解説では次のような指摘がされている。

『潤色栄花娘』の主人公が観音の化身から豆女の心得や禁忌、後の危難などを教えられるのに対し、本作では追放され放浪する中で自ら秘術を獲得して帰参が叶う成長譚の結構を持つ。前作に較べると神仏利生の影は薄く、母から貰った伊勢神宮のお守りが身替わりとなる話(三の一)に顕著な様に、母の信仰を介してその余慶を得る形が取られる。³

宮澤氏は『栄花娘』と『二代娘』の相違に着目し、観音信仰の要素が多かった『栄花娘』と異なり、『二代娘』は神仏の霊験の要素が薄いと述べている。

しかし、『二代娘』ではおかべやお豆(二)の信仰がどのように表現されているのかという点について、この指摘では巻三の一の例しか挙げていない。『栄花娘』と『二代娘』に見られる主人公の設

定の比較を具体的にを行った上で、宮澤氏の指摘が正しいかどうか判断する必要があるだろう。この作業を行う中で、信仰要素以外の特徴を見つけることもできるのではなからうか。

また、『二代娘』は、『栄花娘』やそれ以外の豆男物の影響を受けていると考えられるが、それらの作品からどのような趣向を取り入れたかを具体的に考察した論考は管見の限り存在しない。『二代娘』の特質や豆男物の享受の様相を明瞭にするためにも、『栄花娘』より前に出版された先行作との繋がりを意識した考察も行うべきであろう。

以上のことから、本稿では『栄花娘』と『二代娘』の主人公の設定を比較した上で、『二代娘』の特質がどのようなものであるか、先行する豆男物の記述を踏まえつつ考察していきたい。

一 『二代娘』の梗概

分析に入る前に、佐伯孝弘氏「豆男物の浮世草子―浅草や業平伝説との関係など」に掲載されている『二代娘』の梗概を引用する。

豆〈稿者注… おかべ〉を寵愛する大名夫婦は、豆に子孫を残させようと考え、豆休〈稿者注…『懷男』主人公の大豆右衛門の法体後の名〉ゆかりの豆之進を三河国八橋から呼び寄せて娶せ、娘おきが生まれる。きなが成人し、豆は名跡と術を娘に譲り隠居勤めになる。二代目豆は十六歳の色盛りだが男を知

らないことに焦り、主人の奥様の魂になりかわり殿様と交わろうとしたが、母が介添え役を仰せつかり、もくろみが露頭。不忠・不孝の咎で、一家は閉門、豆は追放となる。豆は江戸中を彷徨い乳母や替女、物堅い武家屋敷奉公をする娘などに乗り移り、欲を尽くすとともに騒動を引き起こす。〈後略〉⁴⁾

なお、結末では追放された屋敷への帰参が許され、今後の豆之進一家の繁栄やお豆(二)の結婚が示唆されている。『懷男』とその続編の『豆男衛門後日女男色遊』(以下『女男色遊』)のように、前作の『栄花娘』の登場人物の一部(主に『栄花娘』巻五の二で描かれる人物)が継続して登場しており、『栄花娘』の作者と同一人物であるかどうかは不明であるが、直接の続編として執筆されていることが分かる。このような『二代娘』の構成について、宮澤氏は「追放・放浪・遍歴・帰参という構成及び前作との血統の連続性は、『魂胆色遊懷男』の後編『女男色遊』の方法を踏襲したものである」と述べている。たしかに、『栄花娘』の構成も、『懷男』にある能力の伝授・放浪・武家への奉公という構成と酷似しているため、『栄花娘』・『二代娘』が『懷男』・『女男色遊』の構成を意図的に踏襲した可能性は高い。

しかし、『女男色遊』の結末は、最初に勤めていた屋敷ではなく別の夫婦に奉公し、大豆右衛門自身は法体することになるため、『二代娘』で描かれる帰参とは異なる。裕福な身分に戻るという点が共

通していると捉えるべきであろう。

二 『栄花娘』と『二代娘』の観音信仰の相違

はじめに、お豆（栄）とお豆（二）の観音信仰の描写の違いから、『二代娘』と『栄花娘』の相違を確認していく。

『栄花娘』巻五の二「色の水上末絶しなき相生の友白髪」と、『二代娘』巻五の一「豆娘が出世は気味の能ひ開中の働」では、浅草の観音への参詣や信仰が描かれる場面が存在する。この二つの章を比較してみよう。

まず、主人公が浅草へ参詣する経緯については次のように書かれている。

おまめもよしはらを見つくし、ちと浅草辺をたづね、日比信ずる観世音にも参詣と、道行人に取つて雷門を入と、〈後略〉
（『栄花娘』巻五の二）⁶

いつそ浅草のくわんおん様は我がか、さまの御出世も、此御仏を深く念じたまひしより一生安楽に暮し給ひし事なれば、いそぎ一心に此御仏を祈らんと浅草の方へといそぎしに、〈後略〉
（『二代娘』巻五の一）

お豆（栄）が願いを叶えるためではなく信仰心から観音に参詣しようとして浅草に足を運んでいるのに対し、お豆（二）は、母親が浅草の観音に祈った結果、屋敷に奉公することができたのを踏まえ、自

分も同じように参詣しようとしている。この記述から、『二代娘』巻五の自一体が『栄花娘』巻五の二を下敷きにしているのは明らかであるが、主人公自身に元々信仰心があったかどうかという点では相違が見られる。

浅草の観音に詣でた後、お豆（栄）・お豆（二）は武家屋敷へと移動することになるが、その経緯も両作品で大幅に異なっている。まず、『栄花娘』では、屋敷へたどり着く経緯が次の通り書かれている。

猶行末をと、其夜御堂のすみに通夜申てとろ／＼寝入に、ふしぎや観世音まくらがみに立せ給ひ、「いかなんち好色の道に心ふかく、清水にちかいせし故、すがたも其ごとくあらゆるたのしみをなすこと、ひとへに丹精無二のしるしなり。〈中略〉汝明る已の刻迄、此所に相待べし。其時辰已の方より来る男の方へ行べし。汝が一生安楽ならん」とくわしくをしへ給ふと思へば、夢はさめにけり。おまめはしん／＼肝にめいじ、翌日己の刻を待居たれば、げに／＼御夢想のごとく辰巳の方より来る男あり。〈中略〉是こそとおまめは袴のすそに取つて行ば、棟門かゞやく御やしきに入ぬ。〈後略〉

浅草に泊まったお豆（栄）の枕元に浅草の観音が現れ、これまでの行跡を認めた上で今後の行き先に関する御告げを与えている。お豆（栄）が屋敷に辿り着く経緯に、浅草の観音が深く関わっている

ことは明らかだろう。

では、『二代娘』ではどう描かれているだろうか。お豆(二)は浅草の観音に祈った後に雷門で男に出会い、次のような会話を聞く。

「上司に行き先を問われた男は」「されば候。御屋敷より、今晚例年のとふり御福引と御謡初、去冬すこ六と宝船、都合八百万枚さしあげ候ところ、是にては不足なればとて唯今のうち早々五百万枚持て参れと御買物遣ひの御注文。是ゆへ方々さがし、漸々都合いたしました、今すぐに納めます」と言ふ。へ中略へお豆(二)は「なんでも此男に付て行かば、ひよつと身の方付もや」と猶も付添ひゆくうち、へ中略へすでに殿様御前様の御前へ持出れば、「はやくも参りし事かな」と御誉あそばさるをこわ／＼のぞき見れば、御面影こそかわれ、其いにしへ勤し屋敷なれば、へ後略へ

男が裕福な屋敷へ向かうことを知って同行したと説明されており、お豆(二)の意図しない形で序盤に追放された屋敷にたどり付いている。

そして、主人夫婦や両親と対面したお豆(二)は、屋敷へ戻った理由を次の通り説明している。

ふしぎにも今日浅草へ参り、帰りがけに御出入の町人とは夢にも知らぬ此方の御奥たからぶねの御用二付、是までしのびて参りしも、みな浅草の御引合せ。へ後略へ

お豆(二) 本人は「浅草の御引合せ」と述べているものの、観音の御告げや霊験は描かれていないため、浅草の観音に祈った結果であるかどうかは不明瞭である。浅草の観音が重要な役割を果たしているとはいえないだろう。

このように、お豆(栄)とお豆(二)の間には、観音に対する認識に大きな相違が見られる。

また、両作品の他の箇所からもこの傾向は読み取ることができる。まず、『栄花娘』では、作品全体でお豆(栄)が清水寺の観音を信仰する様子が描かれており、先に引用した箇所以外にも、祈りに応じて清水寺の観音の使いが現れ、霊験を発揮する場面が数度描かれる。^⑦『二代娘』巻一の一・巻二の一でも、おかべが観音経(普門品第式拾五)を唱えている。

先祖代々伝りし一字なればとお豆といふ名をおきなにゆづり、母は頭に積る雪豆の白くなつたといふこゝろからおもひ付ておかべと改名し、隠居勤の間々には小サナ手を合せて「普門品第式拾五」。(『二代娘』巻一の一)

〈不忠・不孝の罪に問われたお豆(二)に対し、おかべは食事や咽を通らぬほどの物おもひ、日比信し奉る妙智力、明暮観音経を誦誦し、「刀尋段々壊」の所をば取わけ念を入れて丹誠をこらしける信心空しからぬにや、へ後略へ(『二代娘』巻二の一)『栄花娘』にあった清水寺との関わりは見られないが、巻二の一

で「日比信じ奉る」とあることから、『栄花娘』のお豆（栄）の、観音を深く信仰するという設定は、『二代娘』のおかべにも引き継がれているといえるだろう。このように、作品を越えて観音とお豆（栄）・おかべは強い結びつきが認められる。

一方、お豆（二）は、巻五の一以外に観音へ祈る描写は見られない。お豆（栄）やかかべのように観音経を読み上げることなければ、命の危機に瀕した際に観音へ祈ることもない。『二代娘』全体から見ても、お豆（二）と観音には関連がほとんどないと考えられる。

三 お豆（二）の設定と出生の経緯

では、なぜお豆（栄）とお豆（二）の間にこのような相違が見られるのだろうか。お豆（二）の設定からその理由を探っていききたい。前述の通り、お豆（二）は、清水寺の観音の申し子であるお豆（栄）と、『懷男』主人公の大豆右衛門の子孫である豆之進の間に生まれた子とされている。また、お豆（栄）は好色を咎められて軟禁されたことで色恋の自由を祈り、その結果清水寺の観音から能力を授かるが、お豆（二）は次の通り能力を生まれつき有している。

されば二代のお豆、今は二八の恋ざかり、何所もかしこも卯月比、天窓はげたのでも男恋し／＼と新茶の出端。まくら絵の夫いく／＼を読でさへ、かんざしの放されぬほど頭のかゆくなる最中成るに、〈中略〉あわれどのやふな女に成りとも、魂入

替てさせて見たひ事やと明暮おもひ煩らへども、当番の度毎にはいつも両親の内にて送り迎ひして、御殿へ出るとおとこぎれのない奥づとめゆへ、体を借る女は沢山なれども、相手に取べき肝心の男といふもの、殿様より外にはなければ、〈後略〉（『二代娘』巻一の二「目前の御気悦心氣をもやし豆の色盛」）

豆女であることから、他の女性と魂を入れ替えない限り色恋は楽しめないとしている。つまり、お豆（二）と清水寺の観音には関わりがない。この点は『栄花娘』におけるお豆（栄）の設定とは大きく異なる。清水寺の観音が主人公の出自に関係しないことが、観音信仰の要素の消失に影響を与えているのではなからうか。

また、『栄花娘』以外の先行する豆男物『懷男』『栄花遊二代男』『吾妻男仙伝枕』『色道修行男』でも、仙女や仙人となった『懷男』の主人公から能力を授かるという形で豆男となっているため、主人公が能力を生まれつき有しているという設定は、『二代娘』独自の趣向であると考えられる。

このように、出生や能力を得る経緯が異なることから、『二代娘』と先行する豆男物の間には、冒頭で記述される内容にも若干の差異が見られる。以下、『二代娘』以外の作品の冒頭にある主人公の設定に関する記述を見てみよう。

爰に都ぢかき山科といふ所に、前生でまんざら恋の種をまかぬ男ありけり。身貧にしてしかもきりやうあしければ、女にや

さしき詞を懸られたる事もなく、〈後略〉『懷男』卷一の一「仙女はうた、ねの雲を枕」⁸⁾

爰に三代將軍の旧地雪の下辺に、貧成百性に作藏と云者あり。天のとがめし不男にて、一口もいけずの女もなびかと云ふ者なく、〈後略〉『栄花遊二代男』卷一の一「ぶ男は女のふる雪の下⁹⁾の百性」

爰に、武州浅草川のつゞき業平橋のもとに蜆をすくひて世をいとなむ、無骨一べんにして艶なる事はもちろん万事が鈍作といへる男あり。其癖五体不具にして、仏の事は扱置、五百羅漢の内にもあんな不器用な目鼻立はないと、食焚のおふくどのさへ笑ひ物にしける。〈後略〉『吾妻男仙伝枕』卷一の一「赤貝に縁のない業平橋の蜆取」¹⁰⁾

まして此辺土地も水辺にちかく、たゞさへしつ深川の西町といふ所に善了といふ道心あり。年ごろは廿三四にも成けるが、一ツ牀大だわけにして顔色又ふつ、かなり。行歩も痛ありて心にまかせず、物いひ五音をわけかね、いとけなき者のかた言のごとし。〈中略〉此善了、顔色は少し女らしき所あつて比丘尼めきたるが、目はかた／＼たれ目にて其くせきよろつき、足はびつこのやうに引ずり、せいはひきく横ぶとり、とり所なき生付に、〈後略〉『色道修行男』卷一の一「祈る心の思ひも深川西町」¹¹⁾

早此娘十五になりしが、生質しこぶつに大がらなるゆへ、十八九と云ても人のうけ取ははめたことにあらず。其くせに色ぶかく、あそこ爰の若い男をばそ、なかし、〈後略〉『栄花娘』卷一の一「色娘の行末は箔の付た豆女」

先行する豆男物の冒頭では、主人公たちが容姿に恵まれていないことを述べている。各作品で設定に細かい差異が見られるとしても、主人公自身の説明に文面が割かれている点は共通しているといえるだろう。

これに対し、『二代娘』の冒頭は、おかべと豆之進の結婚をはじめ、お豆(二)の両親を中心として物語が展開する。

在原の流を汲し豆男、猶其跡をあふ坂山のさねかつら、人に知られず狂ひ歩行しお豆も浅草観世音の霊夢著し。今はやことなき紅閨に傳奉り、御玉門の奥づとめ、〈中略〉武家屋敷の主人は、〴〵それにつき何卒似合しき微少の男をもとめ、妻合せて子孫を残さんと日比こゝろがけて尋しに、此間聞出せし豆休より三代目の豆作、三河国八橋の辺りにて入贅して一女を儲たるよし聞およぶ。また男子をももふけたらんとおもふあいだ、先達て迎ひの人をさし越たるに、案に違わず色豆男をめし寄せたり。夫婦と成て子孫を残し、女子男子の差別なく代々開中に勤番して、饗応の役目たるべし」と事まめやかなる仰にて、〈後略〉

おかべの設定の確認を行いつつ、結婚の相手となる豆之進の出自を説明している。『懐男』・『女男色遊』の主人公である大豆右衛門を初代、『栄花遊二代男』の主人公である作蔵を二代目とすると、『栄花遊二代男』の次に出版された『吾妻男仙伝枕』の主人公である豆作が三代目となること、また、豆作が八橋で結婚して娘を授かったという記述が『吾妻男仙伝枕』本文にあることから、豆之進の父親とされている「三代目の豆作」は、『吾妻男仙伝枕』の豆作を指していると考えられる。

豆作は好の道とて一日／＼と送りしに、つめむつきの下帯が十月めに舍利粒のやうな女子を儲、夫婦寵愛の余りに「お賢／＼」と呼そだて、仮初ながらはや三とせ、親子三人川の字形りに寝て暮し、末の果報をまちにける。『吾妻男仙伝枕』巻五の三「紫のゆかりの女は杜若の精魂」

先行する豆男物の主人公の子孫であると説明することで、おかべだけでなく、豆之進も豆男の系譜に連なる人間であることを強調しているといえるだろう。

また、『二代娘』巻一の一では、お豆（二）について次の通り述べている。

むすめははや尻かしらにこゝろをつけ、櫛は路考ぐし、腰帯は丸締とのねだり事。かんざしには嵐といふ字を付たいと母方に似たどうかくも、相人に成べき芥子男のなのが両親の安

堵。人のからだをかりての事は、爺なし子の氣遣ひもなしと高をく、つて、〈後略〉（『二代娘』巻一の一）

「両親の安堵」「高をく、つて」とあるように、両親が主体の文章となっており、お豆（二）自身の心中を述べる場面は存在しない。巻一の一点では、おかべや豆之進を中心とした展開になっていると考えられる。お豆（二）が主人公となって思想や心中が語られるのは、巻一の二でおかべから名を受け継いでからである。

以上のことから、主人公の心中描写や能力を授かる経緯を描く他の豆男物と異なり、『二代娘』の冒頭は両親を主人公として結婚・出産を描き、お豆（二）の出自を説明することに重点を置いているといえるのではなからうか。

四 『二代娘』における出生譚の意図

しかし、なぜ『二代娘』巻一の一ではお豆（二）の出自に重点を置いた描写がなされているのだろうか。この理由を明らかにするためには、宮澤氏が次のような指摘をしていることに着目すべきであろう。

豆男・豆女の類本が多く出回るため本書により種の混雑を正すと序文に謳う。併せて春日の里の「昔男豆先生」を開祖とする「男女氏系図」を掲げ、本書の主人公である二代目豆を「豆之進（三代男）お豆が実子惣領」と位置づけて正統を示している。

〈後略〉^⑫

序文と「男女氏系図」では、『二代娘』が豆男物の正統作品であることを強調しているとする。宮澤氏は序文と系譜図にのみ言及しているが、この意識は巻一の一にあるお豆（二）の出自の描写にも影響を与えているのではなからうか。この点を踏まえ、『二代娘』全体を見てみたい。

はじめに、宮澤氏の指摘した序文の全文を挙げる。

今はむかし、奈良京春日の里に豆男かりに往けり。是なん豆の親玉なるべし。夫より豆男豆女の枝葉一粒万倍わくがごとく、類本多して其種の混雜ならんを正し、豆娘の後の巻となして二代の咄しをそここゝとなく書侍^{（後）}□、あやしうこそ物おかしけれ。いでや此巻教訓の書にもあらず、唯古きをたづねて新しき初春の御慰と、山の手のそこらはみなさま御存じ。

「豆の親玉」以降、豆男物の作品が数多く出版されて混乱が生じているため、『二代娘』を正統の統篇として作成したと述べている。続いて掲載される『男女氏系図』では、「昔男豆先生」を開祖として、『懷男』の初代大豆右衛門を「元祖一代男」、『栄花遊二代男』の作蔵を「二代男」、『神霊麦藁笠』の豆之進を「三代男」と記している。また、豆女の系譜では、おかべを「豆娘一代目」、お豆（二）を「二代目」としている。他にも、各人物の出身地や登場する作品名が載せられているが、それに加えて豆之進には「実は元祖大豆右衛門が

子孫」、お豆（二）には「豆之進お豆が実子惣領」という説明が付されている。先に引用した豆之進の出自の説明は、この系譜を意識しているといえるだろう。^⑬

他にも、『二代娘』最終章である巻五の一「豆娘が出世は気味の能ひ開中の働」では、豆之進一家が仕える主人の台詞の中に、お豆（二）が豆男の正統な後継者であることを強調する箇所が見られる。

何々豆之進、此頃きけば釈迦嶽と言ふ男、日本一の大男ともつばらの評判、汝等もまづその如く、古今どつばのけしおとこ、大と小との違ひなれ、家にはちぬ汝が名跡、此うへには相応の男を見立てお豆にそわせ、豆休より続し其方が家筋、子孫の栄花を楽むべし。〈後略〉

豆之進に対して「豆休より続し其方が家筋」と述べている通り、「男女氏系図」や巻一の一で語られた大豆右衛門の子孫という設定が再度掲げられる。『二代娘』が『懷男』からはじまる豆男物の正統な後続作であることを強調するために、巻一の一の出生譚は必要であったといえるのではなからうか。

さて、「男女氏系図」や巻一の一・巻五の一を見ると、「実は元祖大豆右衛門が子孫」（「男女氏系図」）・「豆休より三代目の豆作」（巻一の一）の息子と称される豆之進は、お豆（二）以上に豆男の血統を強調されている印象を受ける。しかし、この豆之進が主人公であるとされる『神霊麦藁笠』は、『二代娘』の巻末にある刊行予告に

名が挙げられている通り、執筆時点では作品が成立していない。¹⁴つまり、『二代娘』は『神霊麦藁笠』の後日談として先に執筆された作品であるといえる。この事実を考えると、『二代娘』における血統に関する設定は、読者に対して次作である『神霊麦藁笠』を宣伝しつつ、豆之進へ関心を持ってもらうために取り入れられた可能性があるだろう。

五 お豆（二）と伊勢神宮信仰

ここまで『二代娘』における出目の設定に着目し考察を行ってきたが、お豆（二）にはそれ以外にもお豆（栄）にはない独自の要素が存在する。宮澤氏が言及した、巻三の一で描かれる伊勢神宮信仰である。

伊勢神宮の神への祈りは、巻二の一と巻三の一で二度描かれている。巻二の一では、飛蝗を捕まえている乳母と子どもによって、大量の飛蝗と一緒に煎餅袋へ押し込まれたお豆（二）が、母親から渡された伊勢神宮の剣御祓を取り出して神に祈る場面がある。

〈お豆（二）は〉只このうへは神力をたのまんと、母親の与へし小サナ剣御祓を真向にかざし、眼をふさいで居たりける。其内に、どんど、んと太鼓の音が聞へると、「ソリヤ太神楽が来た、丸一じや」と坊さまも御乳母どのもおなじよふにうれしがつて欠て行内に、最ふ角下の御屋敷で舞かける。〈後略〉（二二

代娘』巻二の一「命乞の信心終仕負せた追放の割竹」）

この場面では巻五の一の観音と同様に霊験が直接描かれてはいないが、祈った結果太神楽が現れ、乳母と子どもの注意が飛蝗から逸れている。¹⁵

続く巻三の一では、堕胎をしようとする女性とお豆（二）が魂を入れ替えたことでお豆（二）が命の危機に陥ってしまったため、伊勢神宮の神に救済を願う描写が見られる。

薬毒を受べき水子のなきゆへか、開中のいたみたへ難く、此分にては命のほども覚束なし。是もひとへに不孝の罰とはおもひながら、四百四病の内成らぬ開頭痛といふ難病に命はたさん悲しさよ。「天道我を捨給わずは、此大難を救わせ給へ。南無天照皇大神宮」と一心に祈念して女の体をぬけ出るとおもへば、夢の覚たるごとく、最前の三つ物屋が風呂敷の上に只忙然と居たりける。〈中略〉余りの事の不思議さに守袋の剣御祓をだして見れば、勿体なや太神宮の宮の字、錐で突たるごとくに穴明て黒き薬のよふなもの付たり。お豆は信心肝に銘じ、「誠に子宮の宮の字、太神宮の宮の字、同字同体成がゆへに、身替りに立給ひし事有難さよ」と感涙にむせぶ計也。〈後略〉（『二代娘』巻三の一「辻立の咄に乘りのくる浮気娘の悪性」）

堕胎薬の毒に苦しむお豆（二）が「南無天照皇大神宮」と称名して女性の身体から抜け出したところ、伊勢神宮の剣祓にある「宮」

の字が子宮の身替わりになる形で伊勢神宮の神に救われている。結部で「此沙汰誰いふとなく大評判に成、伊勢大神宮御利生のしだひ」という記述も見られるため、この章は伊勢神宮の神の靈驗を中心に描いているといえるだろう。

巻二の二で剣御祓がおかべから渡されていること、また、巻三の一の目録で「母の慈悲おもひあたつた御祓の御利生」とあることから、これらの描写が宮澤氏の述べたように「母の信仰を介してその余慶を得」ている可能性は否定できない。しかし、前述した観音信仰と異なり、明確な靈驗の描写が見られることを踏まえると、『二代娘』における伊勢神宮信仰と観音信仰の要素は性質が異なると考えられる。

そもそも、宮澤氏が比較対象として用いた『栄花娘』では、伊勢神宮への信仰は全く見られない。伊勢神宮が関わる話は『道中之巻』上巻「色を含だ初旅の小風呂敷包かねた身耻」に見られるが、この章では参宮をしようとする女性と魂を入れ替えた結果、お豆（道）が次のような神罰を受けている。

おまめは最前から此体を見て、しきりに気がわるくなつて、「よしや入てぬけぬとても、おれが身ではなし。一トたのしみ仕てからだを出るぶん」と、すなわち女と魂いれかへ、〈中略〉漸々と一ばんしまふてぬかんとするに、何ぞ御罰のうたがいあらん、中々もつてぬけばこそ、〈中略〉おまめも「これはかなはぬ、

もはやからだをかわらん」とおもへ共、かんじんの下がぬけぬ故、たましゐも中々ぬけず、〈後略〉¹⁹⁾

参宮の途中に情事を行うと男女の身体が離れなくなるという俗信から情事をしない女性とお豆（道）が入れ替わり、無理やり情事を行っている。このような俗信は『好色五人女』・『好色旅日記』などの浮世草子にも言及が見られ、色恋を嫌う伊勢神宮の神罰だとされている。特に、片岡旨恕『好色旅日記』では、『道中之巻』と酷似した描写が見られる。

真葛もともに酔たわれ、露うつ、なく床入して、わけもなふとりみだし、心よき事けしからず。胸のとろきおさまりて、ひけども出ず、のけどもはなれず、これはとあきれて「いせまいるのはなしには」といへば、真葛「ほんにさんぐうじやないか、それよ」とうなづきあひたばかり、〈後略〉（『好色旅日記』巻四）²⁰⁾

参宮途中の賀州の源と太夫の真葛が伊勢神宮の境内で情事をした結果、二人の身体が離れなくなってしまう。この俗信については、速水香織氏が「貞享・元禄期には伊勢参宮周辺の話題としてよく語られていた」²¹⁾と述べる。『道中之巻』の参宮は、信仰による靈驗ではなく、先行する浮世草子で描かれた神罰を描こうとしたといえるだろう。このように、『道中之巻』では伊勢神宮の要素が強調されていない。

また、『二代娘』でも、観音とは異なり、おかべ本人が伊勢神宮の神に祈る描写は見られず、剣御祓を渡すという形でしか表現されていない。以上のことから、『二代娘』における伊勢神宮信仰は、前作から引き継がれたのではなく、本作で唐突に現れた要素であると考えられる。

では、なぜ『二代娘』で伊勢神宮信仰の要素が取り入れられたのだろうか。この理由を推測できる記述が、霊験が描かれた次の章である巻三の二「くら闇の弾撥は座頭も眼をあくお豆が了簡」の冒頭に見られる。

さればお豆は、はからざる災難も伊勢の神の御身替りにて怪我のけの字も希有に命をひろひしゆへ、お礼参の心ざしあれども、此比は諸国より夥しく拔参して、道中筋泊々もけしからぬ込合にて、伊勢参の一夜餅が出来るとのうわさ。へ中略へそのうへ抜参の子供等がかどはされるとの沙汰もあれば、その悪者の二またが眼に見付るが最期、両国橋にさらされ、太夫号付て、是は下り／＼の浮恥をか、んは目前なれば、今少し道中筋も静に成て参宮すべし。〈後略〉

お豆(二)が伊勢神宮にお礼参りに行かない理由として、全国で抜け参りが流行して道筋が非常に混雑していることが挙げられている。

このような抜け参りの流行が、明和八年(一七七二)の春ごろに実際にあったとされている。藤谷俊雄氏『おかげまいり』と「え

えじゃないか」⁽¹⁹⁾によれば、明和八年の抜け参りは、近世期の抜け参りの流行の中でも、最も大規模に発展したものの一つであるという。藤谷氏は、「著者が松坂の人であって、当時の日記である」⁽²⁰⁾森壺仙『いせ参御蔭之日記』に基づき、明和八年四月十一日に本格的な流行が始まり、七月廿八日まで全国各地から民衆が押し寄せたとしている。

『二代娘』が執筆されたと考えられる安永二年(一七七三)は、明和八年(一七七二)から二年はどしか経っておらず、江戸の人々にとって抜け参りの流行は直近の出来事であったと想定される。『栄花娘』成立時期よりも伊勢神宮信仰への関心も高かったであろう。『二代娘』の伊勢神宮信仰の要素は、この抜け参りの流行を踏まえて意図的に取り入れられたのではなからうか。以上のことから、清水寺の観音信仰が作品の根幹をなしていた『栄花娘』とは異なり、この要素は同時代の読者の関心を得るために取り入れられた趣向と考えられる。

おわりに

先行論で指摘されている通り、『二代娘』は前作である『栄花娘』と異なり、観音や伊勢神宮といった神仏への信仰が重要な役割を果たしているわけではない。お豆(二)の出自からその要素が排除されたことで、お豆(栄)よりも容易に自由な色恋を描くことが可能

になったともいえる。実際、『栄花娘』にはお豆（栄）が清水寺の観音の使いとして女性を救う章（巻四の二「色」と欲とを一時にい、つめられた唾の一声」）が存在するが、『二代娘』では序文で「此巻教訓の書にもあらず」と述べている通り、お豆（二）が善行をする場面は存在しない。

このように教訓譚が描かれないという点は、『懐男』をはじめとした、『栄花娘』より前の豆男物の傾向と共通する。序文や「男女氏系図」、お豆（二）や豆之進の出自などで先行する豆男物を強く意識した描写がされていたことを踏まえると、『二代娘』は女性を主人公に置きつつも、内容面では『栄花娘』より前の豆男物の作風に回帰しようとしたのではなからうか。

注

(1) 豆男物について、佐伯孝弘氏「豆男物の浮世草子―浅草や業平伝説との関係など」（飯倉義之氏編『怪異の時空2 怪異を魅せる』〈青弓社、二〇一六年二月〉所収）では、「主人公が神や仙人から授かった、異様に小さい身体となる（その他、姿を周囲から見えなくする、男が女の姿になる、他人と魂を入れ替えるなど）ことができる特殊能力によって、自己の願望を満たしたり他人の内実を覗いたりする筋の小説」と定義している。

(2) 『二代娘』の諸本は、国文学研究資料館「日本古典籍総合目録データベース」(<https://basel.nijiac.jp/~tkoten/>)によれば、東京大学附属図書館霞亭文庫（全巻）、天理大学附属天理図書館（巻二・四・五のみ）に伝存が確認さ

れている。本稿における本文引用は、東京大学附属図書館霞亭文庫蔵本に拠り、不鮮明な箇所は天理大学附属天理図書館蔵本で補った。

『二代娘』東京大学附属図書館霞亭文庫蔵本（請求番号…A〇〇〇／霞亭／二八五）の書誌は、次の通りである。

書型、中本、五卷五冊。刊本。縦一八・五センチ×横一三・一センチ。外題なし。内題「潤色栄花二代娘 卷之一（一五）」丁数、卷一、一九丁、卷二、一三丁、卷三、一三丁、卷四、一丁、卷五、一五丁。匡郭、单枠、縦一五・一センチ×横一〇・八センチ。序、卷一にあり。末に「安永三ツのとし／むつまじ月／寝ぼけ先生」との記載あり。跋、なし。末尾に『栄花三代娘』・『神霊麦蘂笠』出版予告あり。

なお、『寝惚先生文集』の著者大田南畝と『二代娘』の「寝ぼけ先生」が同一人物であるかどうかは不明である。

引用に際し、句読点は私に改め、適宜濁点・半濁点を施し、振り仮名は省略した。また、引用中に私に施した注記は〈 〉に、会話は「」に入れた。他の文献の引用についても同様である。

(3) 『浮世草子大事典』（笠間書院、二〇一七年一〇月）、四五七頁。

(4) (1) に同。七二頁。

(5) (3) に同。四五七頁。

(6) 以下、『栄花娘』の引用は、花咲一男氏『風流江戸のふきよせ』三樹書房、一九八二年）所収本文に拠った。

(7) 『栄花娘』における清水寺の観音信仰の要素については、拙稿「『潤色栄花娘』と観音信仰」（『国文学』第三四号、二〇一七年六月）で論じた。

(8) 八文字屋本研究会編『八文字屋本全集』第一巻（一九九二年、汲古書院）、四頁。

(9) 花咲一男氏校訂『栄花遊二代男』（一九八二年、太平書屋）、九頁。

(10) 本文引用は、京都大学附属図書館蔵本（請求番号…四・四二／ア／一貴）

に拠った。

- (11) 本文引用は、天理大学附属天理図書館蔵本（請求番号…九三・六二／イ三六五）に拠った。

- (12) (3) に同。四五七頁。

- (13) なお、本文では『吾妻男仙伝枕』の豆作について言及しているのに対し、『男氏系図』では『二代男』から『栄花娘』の間に刊行された豆男物への言及は見られない。本文と『男氏系図』の記述に齟齬があることは留意すべきだろう。また、おかべが豆之進の娘であるように線がひかれている箇所があるが、おそらくこれは誤りである。

- (14) なお、『二代娘』の諸本の中でも、天理大学附属天理図書館蔵本のみ巻五巻末の『神霊麦藁笠』出版予告に「近日出来全部五冊／来辰の春より出申候御求御覽可被下候」という記述がある。「辰」がいつを指すのかは不明であるが、「来」という言葉があることを踏まえると、近年中に『神霊麦藁笠』を出版する予定があったと推測される。しかし、現在『神霊麦藁笠』の存在は確認されていないため、刊行されなかった可能性もある。

- (15) 江戸の太神楽については、池内恵那氏「江戸の大神楽と獅子舞の機能」『日本語教育研究』第二号、二〇一一年三月）では「伊勢を本拠地とし、伊勢神宮の御師として各地を巡業していた伊勢大神楽が基になって各地に広まったとされる芸能」と説明されている。

- (16) 本文引用は、名古屋蓬左文庫蔵本（請求番号…八／一三／古典籍）に拠った。なお、封醉小史（尾崎久弥氏「校訂潤色栄花娘道中之巻」）〔近世庶民文化〕第六号、一九五九年一月）の翻刻を参照した。

- (17) 本文引用は、早稲田大学附属図書館蔵本（請求番号…へ／一三／〇四一四八）の電子データ（http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenski/html/ne13/ne13_04148/index.html）に拠った。なお、『帝国文庫 西鶴全集前篇』（一九三〇年、博文館）所収『好色旅日記』の翻刻を参照した。

- (18) 速水香織氏『『好色五人女』巻二における「ぬけ参り」の意味』（『皇學館大學人文學會』第二八七号、二〇一五年十二月）。

- (19) 岩波書店、一九六八年五月。五〇頁。

- (20) (19) に同。五一頁。

〔付記〕

『二代娘』の図版掲載をお許し下さった東京大学附属図書館に対し、御礼申し上げます。

— ぶくおか・いすず、広島大学大学院文学研究科博士課程後期在学 —